



Kenkyusha English Classics

THE EGOIST

A COMEDY IN NARRATIVE

BY

GEORGE MEREDITH

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

MASARU SHIGENO

LECTURER OF ENGLISH IN WASEDA UNIVERSITY

TOKYO

KENKYUSHA

1923



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十二年十一月十五日印 刷 大正十二年十一月廿日發 行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎

東京市麴町區富士見町六丁目七番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所

東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麴町區富士見町六丁目七番地

電話九段一五七〇・三八二番

振替口座東京二八六〇一番

非 賣 品

序

本書の註釋を物することは、今から思へば一種の難行であつた、それが兎も角も纏つたのは、私の惡戰苦闘に深厚な同情を寄せられた多くの先輩や知己のお蔭である。先づ、岡倉市河兩主幹が片肌ぬぎの助勢に對し、また、材料の供給、索引の作製、其他何くれさなく世話を焼いて無精者に鞭を當てた上井磯吉氏の熱心と盡力さに對して、私は特にこゝに感謝の意を表する。次に、本書中の拉典文に關し度々示教を仰いた早稻田の高杉教授、五六の難關に梯子を提供された臺灣高等學校の Mr. Wilkinson や東京商科大學の Mr. Johnes に向つても、同じく感謝の意を表する。舊師熊本教授の昔ながらの明快な講釋を聽いて二三の疑團を解き得たことも忘れてはならぬ。本書の缺點に對する全責任は、もさより行者の雙肩に落ちかゝる。しかし、上に述べたやうに四方八方に義理を重ねることになつた元を糺せば、何喰はぬ顔をしてゐる英語青年社が wire-puller で、大それた仕事を私のやうなものに押しつけた責任を世間に對して負ふのは、多分其邊の人達であらう。

大正十二年十二月

天 來

INTRODUCTION

I. メリデイスと其の作品の概観

George Meredith (1828-1909) の家系や幼少の頃の生活に就いては、當人自身が多く語るところを好まなかつたばかりでなく、成るべくこれを曖昧にしようとした形跡もあるので、また精確なことは分つてゐない。Edward Clodd に彼れが語つた所では、其の生誕地は “near Petersfield” といふことであつたさうだが、實は Portsmouth であつたことが彼れの死後に世間に知れた。彼れの作に海軍の者が多く出て、重要な役割を演ずる人物が少くないのは、幼少の頃の見聞に基づいたらうと察せられる (cf. ‘George Meredith and His Fighting Men’: *The Living Age* for March, 1915)。Victoria 女王の従弟たさか、又は Bulwer Lytton の息子たさか言つて、一時評判の立つたのは笑話の種で、實は諺にある ‘nine tailors’ の其一人の子であつた。父の Augustus は Welsh 系、母の Eliza は愛蘭系たさいはれてゐる。Chesteron なぎもさう信じてゐた。1861 年に出版された *Evan Harrington* はメリデイス一家の秘密に光を投げる自傳的興味に満ちた作として有名であるが、それは他處行の着物を着飾つた描寫だから大分割引をして見るがよいといふやうな惡口を叩く批評家もある。メリデイスは radical であり、また、democratic な思想を抱いてゐたに拘らず、妙な所で見え坊であつたらしい。中年以後客を引見する折には、横顔を見られる位置に相手を据ゑたといふ話もある (cf. ‘Meredith Revealed’: *The Living Age* for April, 1919)。

メリディスの母は彼れが生れてから三年程して死んだ。父と二人で寂しい生活をするうちに、生來の強情我慢が大分頭を擡けたらしいが、Portsmouth の東郊 Southsea にある St. Paul の學校に入つた十一歳の頃には、大人振つた態度をして仲間の注意を引いた。此の頃父は Matilda とかいふ後妻を娶つた。1842 年メリディスは獨逸に遊び、Neuwied の Moravian School に入つた。在學二年、宗教的感化は受けなかつたが、獨逸思想は多分に吸収して來た。1846 年父はロンドンの James's Street に移り住んだが、家業が面白く行かなかつたので、同 46 年南アフリカに渡り、Cape Town に店を開いた。

十八歳の時メリディスは或辯護士の事務所に雇はれ、其處で兩三年書記を勤めてゐた。彼れがロンドンで貧乏文士の生活を始めたのは二十一歳の頃であつた。Thomas Love Peacock (1785-1866) の娘で、海軍將校の未亡人 Mrs. Nicholls といふ當年三十歳の美形と結婚したのも同年であつた。彼女は文筆に長けて生計の手助けもして、初めは仲もよかつたが、何分夫と同じ肌の癡癡詩であつたから、随分衝突もした揚句、三人のうちで生残つた一子 Arthur を残して、或畫人と家出をした。夫にも劣らぬ元氣者であつたけれども、苦悶一年の後に死んでしまつた。父の Peacock はメリディスの先輩であり、益友であつた。ニュー・ヨーク大學の教授 John W. Draper は彼れを賞揚して “one of the greatest satirists of the English language, a satirist not of an age but of all time” と斷言し、またロンドンの *Saturday Review* の記者は、メリディスの heroines の素畫が彼れの作中に見出されることや、Dr. Middleton が葡萄酒の批評をする一章が彼れの描いた Dr. Optimian や Dr. Folliott に負ふ所があることを指摘してゐる (cf. ‘New Attempts to Solve the Peacock Puzzle’: *Current Opinion* for March, 1919)。

1851 年メリディスの最初の単行本 *Poems by George Meredith* が現はれた。W. M. Rossetti は同年十二月の *The Critic* に於て、Charles Kingsley は同年同月の *Fraser's Magazine* に於て、いづれも Meredith の詩を推賞した。後者が下した “health” と “honest” の二語は、上記詩集の特色であつたばかりでなく、彼れが生涯の作品を一貫する諸相の二面を逸早くも看破したものである。

1856 年には *The Shaving of Shagpat* が出た。アラビヤ物語に模した神秘的な寓意譚で、George Eliot から ‘a work of genius’ といふスタンプを捺されたが、前の詩集と同様、一般讀書社會には受けられなかつた。半世紀後の 1906 年に James McKechnie の *George Meredith's Allegory, the Shaving of Shagpat* といふのが出て、初めて寓意の謎が解かれ、また、多少の注意を引くやうになつたといふことだ。

續いて 1857 年には *Farina* が出た。これは同名の Cologne の一青年が惡魔を退治して美姫を手に入れるといふ筋の中古風の romance で、大成後の彼れ一流の措辭や構想を豫想せしめる箇所がある。垢ぬけのせぬこそ夥しい奇作で、何さかして originality を見つけたいと悶えてゐる頭曲りの天才の面影が浮ぶ。“Farina is a full-blooded specimen of the nonsense of genius” といふ *Athenæum* 誌の批評は、必らずしも酷ではない。

エリオットの出世作 *Adam Bede* と同年 (1859) に現はれた *The Ordeal of Richard Feverel* は、彼れが作つた最初の novel で、彼れが傑作の一つである。Characterization は後の諸作に劣る所もあるが、詩的熱火の力強さに於て、文體の瑰麗卓拔なる點に於て、同時代の大家連をして驚嘆の聲を放たしめるに足るだけの光彩があつたに拘らず、“Immoral” の一語で讀書界から少くとも二十餘年間は葬られてゐた。主人公の Richard と愛婦 Lucy の別れの場の如きは、沙翁以後英語で書かれた最も力強いものたさ、R. L.

Stevenson は賞讃した。Carlyle は此の書を見て例の調子で “This man’s no fule!” と言つたといふ逸話もある。メリディスは Carlyle や Browning と同脈の力の人であつたのである。此の頃彼れは Swinburne や Rossetti 兄弟と親しくなつた。

1860 年、彼れは *Once a Week* に *Evan Harrington* を連載した。これは比較的読み易いので、筋に變化が多いので、メリディスの入門書と一般に認められてゐる。翌年單行本となつた。此年の夏、彼れは一子 Arthur を連れて大陸漫遊に出かけ、獨、澳、伊、佛を見て歸つた。一時 Chelsea の Cheyne Row なるロウゼッティ兄弟の家で、スウェンバーンと共に、同居したのは此の頃のことであつた。

1862 年に出た *Modern Love* はスウェンバーンが褒め揚げた作で、兎角の評が道學者側から出たが、今では Victoria 朝の一大産物たることに異存を唱へる人はなからう。大體十六行の詩を五十珠數つなぎにした形になつてゐる。妻の不義を知つて苦惱する夫の口を借りて、微妙な三角關係から、更に一美形が加はつての四角關係から生ずる心情の變移を、或は咏嘆し、或は批評し、或は解剖しつゝ、終に自然的和解に終るまでの委曲を盡したものである。後年 Arthur Symonds はこれを評して、“It will always remain, beside certain things of Donne and of Browning, an astonishing feat in the vivisection of the heart in verse.” と斷定した。日本では、明治四十年前後に、帝國文學誌上で、此の詩の紹介を試みた人があつたやうに臍氣ながら記憶してゐる。

1864 年、メリディスは Vulliamy の三女 Marie を後妻に迎へた。此の年の八月に親友 Frederick Augustus Maxse に送つた手紙の中に、“I have written of love, and never felt it till now.” といひ、また、“When her hand rests in mine, the world seems to hold its breath, and the sun is moveless.” といつた所を見ると、彼女に對する彼れの心持がよく分る。彼女は 情の深い無口の人であつたが、

ピアノにかけては “She has a divine touch on the notes.” と彼れが自慢した位であつた cf. ‘George Meredith’s Own Love-story’, *The Literary Digest* for August, 1912)。兩人の結婚後、Arthur は父と不和になつて家を出たが、程なく病氣のために舞戻つて來た。此の年に *Emilia in England* (後に *Sandra Belloni* と改題) が出た。Miss Emilia Belloni といふ快活な力強い女性を中心とした劇的作品で、作者の熱情と明智が濃厚に浸潤してゐるといふことだ。

1865 年男の子が生れて、William Maxse と名づけた。此の年に第二の傑作 *Rhoda Fleming* が出た。Arnold Bennett は此の小説を *Egoist* をメリディスの逸品だと評してゐる。Rhoda と Dahlia といふ姉妹の田舎娘を出して、後者が村の Squire の甥 Edward Blancove の犠牲になる悲劇が主となつてゐるから、寧ろ ‘Dahlia Fleming’ と呼んだ方がよいと思ふのはベネットはかりではない。上流社會の描寫に力を注いだメリディスには珍らしい作で、彼れが筆をつけなかつた方面に、若し氣が向いたなら何處まで位は行つたらうといふとを十分に暗示してゐる。此の點に就いては Henderson は次のやうな斷定を下した。 “At any rate he has proved here, past all dispute, his mastery over the simpler chords of human emotion, his power to reveal tragic heights in an everyday story without any loosening of hold upon reality.”

1866 年の *Fortnightly Review* に *Vittoria* が出た。當時彼れは *Morning Post* の war-correspondent として伊墺戰爭の視察をしてゐた。翌 67 年 *Vittoria* は本になつた。伊太利を舞臺とした悲劇的 romance で、自然描寫の詩美で名高い。此の年彼れは Box Hill に新居を構へて、其處を永住の場所とした。

1871 年に出た彼れの最長篇 *The Adventures of Harry Richmond* もまた注意すべき作品である。其の前半に就いて言へば、彼れの最大傑作であらうし、また、恐らく Roy Richmond は彼れが創造

した人物中の最大なるものであらう、さ Henderson は評してゐる。前作 *Evan Harrington* の續篇とも見らるべき箇所が多い。

1868 年、彼れの親友 Frederick Maxse は急進黨の candidate として立ち、メリディスこれを助けて大いに運動をしたけれども、不幸にして落選した。彼れは此の人をモデルとして政治小説を作つた。1876 年に出た *Beauchamp's Career* がそれで、主人公對 Cecilia の romance で艶をつけ、愛蘭士問題や自由保守兩黨の政争などを取扱つてゐる。政治小説としては藝術味の豊かなものたさいふ。

1877 年には *The Case of General Ople and Lady Champer* と *The House on the Beach*、同 79 年には *The Tale of Chloe* が、*New Quarterly Magazine* に出た。第一は喜劇的、第二は悲喜劇的、第三は悲劇的の短篇で、第三が最も難解ではあるが、最も藝術的に出来てゐる。Chloe は失戀をした神秘的な薄氣味の悪い賢女で、メリディスが創造した女性の中では最も深みのある部類のものらしい。全篇に俳句式幽玄味が漲つてゐる。

1877 年には、また、London Institution で、‘On the Idea of Comedy and the Uses of the Comic Spirit’ さいふ題を掲げて彼れは異常な講演をした。それが一旦 *The New Quarterly Magazine* に出て、1897 年に今の *An Essay on Comedy* さいふ單行本となつた。喜劇に關する彼れの意見は此の書に盡きてゐる。彼れは Aristophanes 以後歐洲各國の代表的 humourist の精神を檢閲し、批評し、解剖し來つて、喜劇の眞髓は ‘humour of the mind’ にあることを高唱し、前人未發の見を樹つ。1879 年に出た *The Egoist* は上の議論を體現したもので、彼れの思想と手腕が正に其の頂點に達したことを示してゐる。

1880 年十月から翌 81 年二月までの *Fortnightly Review* には、*The Tragic Comedians* が連載された。女性の描寫を得意とし、且つ彼等に比較的多く同情を寄せる傾向があつたので、一部の人々

から feminist と目された著者が、悲喜混交の怪腕を揮つて、Sigismund Alvan といふ人物に於て *The Egoist* とは反對に温みある男性描寫の一例を示した、メリディスの小説は大抵事實を基礎としたものであるが、此の一篇は特に獨逸にあつた實話を其の儘取つたと作者が自稱したといふだけに、彼れの手法を窺ふ上に興味のある作である。

1883 年九月、愛妻 Marie は病死した。此の年に *Poems and Lyrics of the Joy of Earth* が出た。

1884 年から翌 85 年にかけて發表された *Diana of the Cross ways* は、彼れの小説の中で最も俗受がよく、一年間に三版を賣盡した。當時の交際社會の花形、詩人兼小説家として、才色並び秀でた Caroline Norton をモデルとして、female Egoist を描いたのであるが、サー・ウィロビを剗つた irony の鋭さはなくて、作者の態度は何となく “enamoured historian of the Erring Beauty” といふ彼自身の文句を想はせる。Diana はクレアラと共に作者が自作中の pet だといふ。高遠の理想を抱いて俗衆と闘つて來たメリディスが一寸世間に向つて秋波を送つたといふ風情がないではない。

1887 年には *Ballads and Poems of Tragic Life*、翌 88 年には *A Reading of Earth* といふ詩集が出た。

それから引續き出版された結婚小説は、*One of Our Conquerors* (1891) と *Lord Ormond and His Aminta* (1894) と *The Amazing Marriage* (1895) の三篇で、作意の深刻さが段々に増してゐる。第三のは結婚のあらゆる種類に解剖を加へたもので、彼れが最後の傑作、また、難解の奇書として知られてゐる。

1892 年には、*Poems; The Empty Purse, with Odes*、1898 年には *Nature Poems* が出た。

メリディスは三十年間、所謂 publisher's reader として Chapman & Hall 社の爲に新文學書の内容を檢閲した。William Black

の *Alec Grange* や *James Merle* を推奨し、George Gissing の *The Unclassed* や *Isabel Claredon* に熱心に助力したのは彼れの手柄だが、Samuel Butler の *Erewhon* を排斥したのなどは、何は兎もあれ、本屋側からいふと大失策であつた (cf. 'The Silent Power of the Publisher's Reader': *Current Opinion* for August, 1919)。

前に述べた以外のメリディスの詩に就いては、簡単に二三の批評を紹介して置かう。Edward Bennett は Thomas Hardy の *The Mayor of Casterbridge* が *The Egoist* よりも優れてゐるといふ一風變つた説を立てた後で、彼れの詩を評していふ、"The volume of Meredith's verse is small, but there are things in it that one would like to have written. And it is all so fine, so acute, so alert, courageous, and immoderate." これは雑誌によく出る概括評の善惡兩面の見本のやうな文句だが、しかし、先づ此の位のところで彼れの詩を大觀するのが便利であらう (*Books and Persons*, pp. 177-8)。次に Quiller-Couch は *Love in the Valley* を激賞して、"All that Swinburne or Rossetti ever wrote fading out like fireworks or sick tapers before its sunshine." と言つてゐる (*Studies in Literature*, p. 185)。此の評は一寸丸呑する譯にはゆかないけれども、斯うも評せられる作が彼れにあるといふことの参考になる。"Q" はまた "Irradiate, and through ruinous floods uplift" といふ一行を評して、"it could never have been written, after Milton, by any but an authentic poet" (*Ibid*, p. 173) と言つてゐる。これは聊か樂屋落の嫌ひはあるが、メリディスの律語の一面を語つた suggestive な言草であらう。最後に一寸私見を述べるに、彼れが詩才を窺ふ一便法は、彼れの *The Lark Ascending* を Shelley の絶唱 *To a Skylark* と比較研究することである。

II. 「エゴイスト」の梗概と其の批評

Sir Willoughby Patterne は女性を召使はかりの家庭に日輪の如くに君臨する貴公子であつた。屋敷の片邊に住む退職軍醫 Mr. Dale の一人娘 Lætitia はウィロビと幼馴染の仲好しであつた。單純な娘の胸にはウィロビはいつの間にかお伽噺の prince となつてゐた。ウィロビの眼に映じた彼女は princess ではなくて、princess 風の sentiment を有する彼れの姿に鏡を捧ぐる侍女に過ぎなかつた。従つて彼れは他に princess を求めた。或貴族の若い未亡人が殆んど彼れを捕虜にしたといふ評判も立つた。同時に Miss Durham との婚約が傳へられた。嬢は health, money, beauty の三資格を具備してゐたけれども、其の無遠慮な言動は彼れの潔癖を傷つけた。彼れの中心の希望をいへば、「雛兒のやうに卵の殻から抜けて出て、その雛兒よりも尙多少無邪氣に物を珍らしがり、それと同様に殻に口をあけてくれるまでは十分深く藏れてゐて、女性の眼をして男を見るのは自分が初めてであつて欲しかつたのである」(p. 22, ll. 2-6.) 此の希望を満たす婦人はリチシヤより外には無かつた。ダラムは彼れを一蹴して仇し男に身を投じた。彼れは世間體を繕ふ爲に彼女は元來母が選んだと言觸らし、リチシヤを醜弄して己れの傷を癒やし、秘書役たる従兄の Vernon Whitford を連れて世界漫遊の途に上つた。

久し振りで戻つた英國の春の野でウィロビはリチシヤに逢ひ、彼の女の眼の中に相も變らぬ自己を發見して、それを抱きしめた。リチシヤが一陽來復を喜んだのも束の間で、またもや例の三資格を具備した當年十八歳の Miss Clara Middleton が地平線上に現れた。ダーノンは彼女を評して 'Mountain Echo' といひ、警句家の Mrs. Mountstuart は 'A dainty rogue in porcelain' と評した。此の rogue がウィロビの氣になつてならない。で、彼れが彼女に興へた

第一の説法は、世間と隔絶して兩人の oneness に立籠ることであつた。次に彼れが強要したのは 彼れ死後の彼女の貞節であつた。それを守るべく豫め誓へる言葉を盡して迫るのは寧ろ氣の毒な位であつた。此の二大問題が感情の冷却を來す誘因となつて、クレアラは煩悶を重ねた。苦しさの餘りダーノンに救ひを求めたが、彼れは gordian knot を一刀兩斷する英雄ではない。種々忠告はするけれども、要するに本人の決心が第一だといふ。父ミドルトン博士はバターン邸の美酒にうつゝを抜かして、婿君の合槌はかり打つてゐる。仕方なしに腕白小僧の Crossjay を相手に憂さを晴らす。此の小僧はバターン姓を名乗る一 marine の子で、ダーノンが引取つて世話をしてゐるのであつた。何でもウィロビは此の子の親を遠方遙々招待して置きながら、屍體が餘り見ずばらしかつたので cutting をやつて追ひかへし、其のため本人は風を引いたといふことだ。クレアラの魅力は非常なもので、彼女に接するものは皆引きつけられた。此の小僧は其の最も目立つたもの、嬢から一令が下れば、灰が降つても岩が降つても立ち通すボムベイの衛兵の二の舞でもやりかねぬ勢であつた。併し、今のお役には立たないので、クレアラはリチシヤにも半分打明けた。是れより先ウィロビはクレアラから婚約の解除を迫られて大いに驚き、百方彼女を説き諭したけれども、先方の反抗心は募るばかりなので、リチシヤを屋敷に招き寄せ、盛んに彼女と頓才の應酬をし、嫉妬の種を少しくクレアラの心に培養しようを試みたのであるが、それがまた案外な不結果になり、本人同志がいつの間にか意志の疏通を圖るやうになつた。ウィロビは口癖のやうに、リチシヤはダーノンに遣はすのだと言つて、實際はこれを放さない工夫はかりしてゐた。殊に滑稽なのは、クレアラに對して或利己的な人物の逸話を語り、Egoist に氣をつけると言つたことで、これが爲め女の方では今まで判然と意識しなかつたウィロビの稱號を見つけて、一

層彼れを毛嫌ひするやうになつた。

元パターン家の別當をしてゐたのが一度自分から暇を貰つたが爲に二度と歸參を許されぬ呑んだくれの Fitch さいふ男が、或日、花婿の best man を勤める筈の中佐 De Craye さいふ愛蘭土生れの才物を早馬車に乗せて來てから、今まで働き込んでゐたクレアラの調子は一變した。彼れの眼には總べての人間は平凡將棋の駒であつた。彼れは許嫁の二人の間に己れの乗すべき隙があるのを早くも見て取り、機智の限りを盡して極力クレアラの足を存かさうとした。二人は一見舊知の如く、小川と小川のさゝやき合ふも斯くやと疑はれた。ウィロビの青い眼はド・クレエに向つて閃めき始めた。

或風雨の日、クレアラはパターン邸を抜け出した。邸内の騒ぎは天候以上であつた。ウィロビ自身が大長靴はきで探しに行つた。クレアラを停車場で見つけたのはブーノンであつた。彼れは嬢を停車場脇の旅館に連れ込み、宿の女に着物や靴下を干させながら世話を焼き、ブランディのコップで間接の接吻を竊んだりしたが、丁度此の時にマウントスチュアート夫人がロンドンからの客クルクリン教授を迎へに來たのを見て、夫人に目かくしをするために骨を折つてゐるうちに、クレアラはド・クレエに奪はれ、フリッチの馬車で邸へ舞戻つた。ド・クレエと共にロンドン行の列車に飛込まなかつたのは、クレアラが衝動一點張の婦人でなかつたからである。

さて、一旦歸つては來たものの、クレアラの心はますますエゴイストから離れるばかりで、何さかして父の同意を得たいと焦つたが、ウィロビが懸命になつて博士を抱込んでゐるので、已むを得ず今度はマウントスチュアート夫人に事情を打明けた。夫人は委細を承知して旨くウィロビに謎をかけたが、先方はそらとぼけた挨拶をしてゐた。しかし、形勢の非なることは十分に悟つたの

で、千思萬考の上一計を案じた。それは、あの見すばらしいザーノンと結婚するさいふ条件なら、クレアラを解放しようといふのであつた。ド・クレエとクレアラとの間を察してゐたから、其の復讐の爲めと、出来ない相談をもちかけて運よくは縁談のよりを戻さうが爲めと、其の他複雑な理窟があるのであつた。此の案を發表する前には此方の準備も必要なので、或夜、深更に、應接室ヘリチシャを引張り込んで熱烈な調子で求婚を申入れた。リチシャの眼も最早明いてゐる。二つ返事で手を渡すたらうと思つたのは外れて、ウィロビは冷酷にも刎ねつけられた。加之、此の一部始終は此室の片隅の ottoman にくるまつてゐたクロスゼイの耳に入つた。

翌朝、一件は先づ郡の自稱流行醫者 Corney に傳はり、ザーノン、ド・クレエに傳はり、Busshe、Culmer 兩夫人の地獄耳にも傳はつた。斯くとは知らぬエゴイストは、昨夜の不首尾の反動烈しく、博士の助言を恃んで、契約履行の詰談判をクレアラに持ちかけた。クレアラ言葉に窮し、暫時の休戦を請ひ、池のあたりで一息ついてゐると、昨夜の秘密を聞き囁つたド・クレエが窺ひ寄つて得意顔に報告をする。これに勢を得てクレアラは再びエゴイストに向つたが、あれはザーノンのために彼女に説いたのたと言ひ黒められて、またもや行詰まる。今度はザーノンが天狼星のやうな眼を光らして現はれ、流石のエゴイストもぎよつとしたが、それでも懸命に言紛らしてゐると、無遠慮なマウントスチュアート夫人が駆けつけて、四邊かまはず對リチシャの祝詞を述立てる。最う斯うなつては仕方が無いから、ウィロビは夫人を片脇に招き、ザーノンと結婚するなら解放するさいふ一條をクレアラに話し込むことを頼み、自分はザーノンに説くべく圖書室に連れ込んだ。

意外にもクレアラはザーノンを受けるさ答へた。ウィロビは驚いて自身で本人に駄目を押してみた。ザーノン以外の何人とも結婚しないさ嬢は斷言した。ザーノンは決してウィロビやド・クレエ